

Café des open



三浦一族

Menu

第27回

宝治合戦

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

鎌倉時代、三浦氏は執権北条氏と婚姻等を媒介に密接な関係を築いていました。しかし、三浦義村の晩年から子の泰村の時代になると、両者をつないでいた人物たちが次々に没していき、その関係にも徐々に陰りが生じ始めるようになります。また、4代将軍をつとめた藤原頼経が鎌倉から追放される事態が生じると、頼経の近臣であった三浦光村（義村の子で泰村の弟）は、これを行った執権北条氏に対し強く反発するようになります。さらに、4代執権北条経時や5代執権北条時頼の外戚であった安達氏との対立も顕在化し、その争いは激しさを増していきました。

そうしたなか、鎌倉では不吉な自然現象が生じたといえます。『吾妻鏡』によれば、宝治元年（1247）3月、由比ガ浜の海が赤く変色して血のようになり、黄色い蝶が鎌倉中に乱れ飛び現象が起きたと記されています。こうした現象は、過去にもあり、兵乱が起きる前兆とされました。5月21日には、鶴岡八幡宮の鳥居の前に、「三浦泰村は独断的で厳命に背いているため、近日誅伐が加えられる」と書かれた木札が立てられ、これを多くの人が目にし、鎌倉はますます不穏な空気に包まれていきます。この頃、執権時頼は、軽服（きょうぶく／軽い服喪）のため、泰村邸に寄宿することもありましたが、三浦氏が安房や上総などの所領から船で甲冑を取り寄せ、武備を整えているとの情報を得て、より警戒度を高めるようになりました。6月3日、泰村邸の南庭に泰村討伐を示唆する落書が掲げられると、泰村は自分に害をなそうとする者の仕業であると、すぐに落書の板を壊し、時頼に異心などないことを申し述べ、釈明します。しかし、翌4日には、泰村邸及び時頼邸にそれぞれ味方する武士らが集結し、その数は自他の軍勢を判別できない規模となったことから、幕府は双方に退散を命じました。これを受け、5日には、泰村が時頼に改めて逆心はないことを誓言し、書面で和平案が取り交わされるに至ります。泰村は、ぎりぎりまで和平の道を探り続けましたが、それは相当な緊張状態のなかで行われていたようで、交渉を終え、妻が湯漬けを用意すると、泰村は一口食べたところで、すぐに嘔吐してしまったといえます。

いずれにせよ、泰村と時頼との間で和平案がまとまり、事態は落ち着いていくかに思われました。しかし、この状況を快く思わなかったのが、三浦氏と対立関係にあった安達景盛（かげもり）です。景盛は、この期を逸すれば、いずれ安達氏は三浦氏に対抗できなくなると考え、和平交渉を終えた北条方の使者が時頼のもとに帰参

宝治合戦関係図



（『鎌倉市史 総説編』191頁の図を修正の上、作成）

する前に兵を挙げます。鶴岡八幡宮付近で挙兵した安達勢は、筋替橋（図①）を通り、西御門の泰村邸（図②）を急襲します。一方、すでに合戦が始まっているとの知らせを聞いた時頼は、和平の道を断念し、弟の時定を大將軍に任じ、泰村討伐を命じました。

こうして、一旦まとまりかけた和平の道は、崩れ去り、一気に合戦勃発へと変わります。当初、三浦勢は弓矢で防戦を図り持ちこたえていました。しかし、その後、風向きが北風から南風になると、泰村邸の南側から攻めていた安達勢はこの機を逃さず、泰村邸に火を放ちます。火は風の勢いで屋敷に燃え移り、たちまち泰村邸は炎上しました。一族は炎上する館から逃れ、源頼朝の墳墓堂であった法華堂（図③）に立てこもります。一方、泰村の弟の光村は、永福寺（図④）に陣を置いており、泰村に城郭として優れた永福寺で迎え討つことを提案します。しかし、泰村は「どんなに優れた城郭であったとしても、もはや逃れられない。最期は頼朝公の御影の前で迎えたい」と述べたことから、光村は永福寺を出て敵陣を突破し、兄弟は法華堂で合流しました。ただ、すでに弓矢は尽き、勝敗も決していたため、泰村・光村ら一族以下276名、総計500余名は、法華堂前で自害して果てました。

こうして、平氏打倒のため、伊豆で挙兵した源頼朝を当初から支え、鎌倉幕府の成立に貢献した三浦惣領家（本家）は、滅亡しました。現在も、北条義時法華堂跡付近には、三浦氏のものと思われるやぐら（図⑤）が残されています。